

## 学 位 論 文 審 査 の 要 旨

	花形 美緒【論文博士】 【ジェンダー学際研究専攻 平成20年度生】 (平成29年3月31日 単位修得退学)	要 旨
学位申請者		<p>本研究の目的は子どもの世話をする立場と子どもの教育に関わる立場における母親役割の葛藤について、幼少期から高校生の子どもの持つ 502 名の母親から収集した母親役割に関する量的調査及び子どもの排出期の 16 名の母親を対象として行なったヒアリング調査の 2 種類のデータ分析から明らかにすることである。パス解析の結果として女兒を持つ、子ども数が多い母親において子どもへの生活自立促進行動が頻繁であること、教育に関しては母親自らが勉強を見て指導するよりも教育の種類を選択する「マネージャー」としての役割を遂行している場合が多いことなどが提示された。ヒアリングデータの分析結果としては、子どもが徐々に自立し母親役割がゆるやかに縮小するのではなく、母親の世話役割が一気に縮小するために喪失感を経験する母親が多いことがわかった。またこの喪失感は夫の子どもへの関わりが多い場合は軽減されていることも明らかにされた。</p> <p>予備審査委員会は平成 29 年 8 月 24 日に開催され、本審査委員会は平成 29 年 12 月 21 日、平成 30 年 1 月 31 日の 2 回開催された。これらの審査委員会においては、母親の世話役割と子どもを教育する役割の葛藤などについて量的・質的データを収集・分析し検討したことは評価されたが、異なった手法により収集されたデータを一貫したストーリーラインでつなぐ必要があることなどの指摘があった。審査委員の指摘に基づいて再分析を含む大幅な修正が行なわれ、審査委員全員のコメントに対応した結果、審査委員会を重ねるごとに、かなりの改善が認められた。</p> <p>審査委員会は、子どもの生活自立を促す母親役割についてライフコース視点から検証したこと、量的データとヒアリングデータの分析により母親の葛藤の変遷についての詳細を解明できたこと、パス解析により子どもの生活自立と母親の子育て肯定感の関連を検証できたこと、インタビュー調査の分析により子離れの達成と母親役割調整の関係について詳述できたこと、学術かつ教育的に重要な示唆を導き出したことなどが本研究の主な意義であると認めた。</p> <p>公開審査会は平成 30 年 2 月 19 日に行なわれ、申請者の発表はよく整理され、多くの質問に対して適切に応答した。審査委員会は、本論文が、本学大学院人間文化創成科学研究科の博士の学位の水準に十分達していることを認め、合格とし、博士(社会科学) Ph.D. in Family Sociology の学位を授与することを全員一致で決定した。</p>
論文題目	子どもの生活自立をめぐる母親の役割移行	
審査委員	(主査) 教授 石井クンツ 昌子	
	教授 藤崎 宏子	
	教授 小玉 亮子	
	教授 菅原 ますみ	
	准教授 斎藤 悦子	
インターネット 公表	<p>○ 学位論文の全文公表の可否 ( 可 ・ <input checked="" type="checkbox"/> 否 )</p> <p>○ 「否」の場合の理由</p> <div style="border-left: 1px solid black; border-right: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 5px; margin-left: 20px;"> <p>ア. 当該論文に立体形状による表現を含む</p> <p>イ. 著作権や個人情報に係る制約がある</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> ウ. 出版刊行されている、もしくは予定されている</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> エ. 学術ジャーナルへ掲載されている、もしくは予定されている</p> <p>オ. 特許の申請がある、もしくは予定されている</p> </div> <p>※ 本学学位規則第 22 条第 4 項に基づく学位論文全文のインターネット公表について</p>	

